

2017年11月5日<聖霊降臨後第22主日礼拝>飯川雅孝牧師

招詞：ルカ6：47-49 聖書：マタイ13章1-9節

説教：『新しいスタートを切る友のために』

1. はじめに：人生のガイドへの感謝の思い（説教者の体験から）

来る11月23日に、この礼拝堂でJさんとMさんの結婚式が執り行われます。お二人を皆さま方と共に祝福したいと思います。本日の説教はお二人のみならず、若い人、人生途上にある人、またまとめに入っている人にも共通な学びであると存じます。

私ごとで恐縮です。20歳の頃、信仰の師に出会いました。その時教えてくれたことが昨日のように今だに脳裏を抉ります。若い時の学びの目的は、人生の師と生涯の友人を得ること。社会人になって間もなく、会社は毎晩遅い。その時「忙しい時ほど人は本を読める。」とお手紙をいただきました。多忙を理由に怠けることがないようにとの思いやりから、読書をよくするようにと勧められました。「古典というものは長い人類の財産であるから、その一行にも、一言にも自分の人生を左右する言葉がある。聖書を初め、幅広く本を読むように。」その頃、いただいた本の一つに『紙幣寮夜話』という本があります。その要点は、明治の時代、初めは「紙幣」は職人の名人芸によって造られ、彼らはその芸を謳歌し羽振りも良かった。しかし、印刷術が発展すると彼らは失業し、生活にも困るようになった。それを読んで、技術は陳腐化する、時代とともに新しいものが要求される、基本となる本質は残るが新しいあり方を社会が求めると。人格的生き方を求めることと同時に、技術者として生きる上での知恵を教えていただいたわけです。自分にとっては大きな方向付けをいただいたと感謝しています。

2. 先達の示す指標と主イエスの導き

人生を歩む上でのガイドとして、有名なカール・ヒルテイの『人生の階段』があります。ヒルテイは19世紀半ばから20世紀初頭にかけて活躍したスイスの聖人と言われる人です。その著作は幼い頃から試練の多い青年・壮年期を経て人生の実りの時期に至る、その過程のガイドです。どんな人の生涯でも「階段」をもつ。立派な人の生涯にも、つまづき、つまり階段はあるが、人生のそれぞれの時期にその時でなければできない目的や課題がるからそれを心に残すべきであると語ります。

- 1) 年少：子供らしさ一人は完全な、他人に喜びを与える人格を養う。
- 2) 青年：考えの新鮮さと高揚一行動への力を生み出すもの
- 3) 壮年：あらゆる思考及び感情の十分な成熟と、すでに果たされた行為によって鍛え上げられた性格の堅固さ
- 4) 老後：以上が果たされた場合にのみ、老年も自らの貴い使命に答えることができる。そして今後の一層堂々とした展開に備えることができる。

お二人ともすでに社会人としてこの世の荒波に乗り出した方でありますから、この時期は自

分で自分の道を切り拓くことが求められ、峻厳な中間期に入って、これから生涯に一度は辛い運命に耐えなければならない時であります。そして、真直ぐな生き方をしていれば、この時期に逞しく成長して、やがて来るべき老いに向けて、その時円熟し、完成した人生の完全の相を示すことが出来る。これは事実でありますから、誰しもそうなれるように今の時を大切に生きたいと思えます。

このことを、主イエスは譬えを用いて奥深く語ります。わたしたちが良い地として、神の真理を受け止める姿勢を持つこと。そうすれば、人生の過程で、この世の誘惑に勝ち、着実にその時の実を刈り取って行く。終わりの時、百倍、六十倍、三十倍の実になる。楽な道、気を抜いた生き方をしていれば、実りの時になっても実がつかない。そして、成長する過程について、「人は試練によって成長する。」とも「血と汗と涙の人生。」とも言われます。その歩みをイエスは次のように語っております。「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、揺り動かすことができなかった。」と。地面を深く掘り下げるのは「血と汗と涙」です。しかし、そうしない人は、「土台なしで地面に家を建てた人に似ている。川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方がひどかった。」だから、収穫の時に実がなるように今から気を引き締めて行きなさいとの勧めであります。

先週の日曜日に礼拝の後、江戸川橋で開かれていたお二人の作品の展示を拝見する機会がありました。革製品のカバンや財布の表面の均一性に共感を覚えました。作品を仕上げるために相当な格闘があると素人目にも感じました。また、素材選びも大変だろうと感じました。これから、技術面のみならず経営的な面でもかじ取りが求められることが多いとも思いました。良い土地に落ちた種が、実を結ばれるようになっていただきたいと思っております。

3. 実績のある先達に学ぶ

1) 悪戦苦闘の努力：ENDEVORS

さて、1－2週間前から、世界的に有名な、安藤忠雄という建築家が朝日新聞に履歴を連載しておりました。名前は聞いておりましたが、啓発されることが多々ありました。そこで、先週、氏の展覧会を見に、乃木坂の「国立新美術館」の行きました。建築上の専門性は当然分かりませんが、実物大の「光の教会」の模型もあり、作品の独創性・斬新性・自然調和という面では何かすごいなと感じました。この展覧会のために出版した建築写真集の冒頭で、氏は建築家としての若い頃から今まで何事にも挑戦して来たと言います。世界的にすごい賞を得ている方としては、その文章からは謙虚な努力家の格闘という生き方を感じます。

ご事情により、工業高校を出た後、建築事務所で働かれます。高校の時はボクシングのプロを目指したということですからエネルギーが豊富であったようです。同じジムに世界チャンピオンになったファイティング原田がいて、その強さをみて諦めたという事です。また、建築家としてはバラ色の未来が開かれていたわけではないので、どうしたらよいか悩んだ。そ

して、世界を旅行して考え、インドのガンジス河で死人の死臭とそこでも強烈な生き方をする人の姿を見て、「自分に出来ることをやろう。」と決断します。

小さな設計事務所を開いてから50年余り、その全てに異なる条件と課題に対しても常に“挑戦：ENDEVORS”の精神を貫いて来た。

最初の10年くらいは、仕事がもらえない。もらえても小さい。その逆境をいかに乗り越え、自分なりの思いを実現できるか、建築を職業としてゆくこと自体が挑戦でした。意思表示として「都市ゲリラ住居」という文章を書いた。長屋の狭い空間に造った場違いのコンクリートの建物が建築賞を得て認められ、次第にすごい賞を得るような建築家になって行きます。無我夢中の日々を過ごしているうち、徐々に仕事の規模も大きく、内容の幅も広がっていききましたが、つくる困難に変わりはありません。設計の自由度が増せば、その分思いもふくらんで、結局、現実の与件をはみ出してしまうから。

そうした過程で、建築そのものへの考え方を自分に問いかける。建築の本質とは、人工と自然、個人と社会、現在と過去といった、人間社会にまつわる多様な事象のあいだの関係づくりであると考え。人々と共に木を植えて街に緑を取り戻すことも建築。既にある風景、社会制度の中でその枠から外れると摩擦や衝突が起こる。建築の原点たる住まいの問題、空間と光と影といった美学上の問題、あるいは都市空間、場所の風土の問題。つくる度にさまざまなテーマに直面し、それらに建築で応えるべく、悪戦苦闘してきた。また、安藤さんは自分の仕事が成功し、評価されたことを自分と関わった人への感謝として述べています。そうした中で、元々優れた彼の才能が優れた人との出会いで開花して行きます。私たち設計者と思いを共有してつくるチャンスを与えてくれるクライアント、技術的努力を惜しまない施工者、出来上がった建築物を評価し、理解してくれる社会がある。こうしてはじめて私の目指す建築は成り立つ。この闘いをいつまで続けることが私の人生の終わりのない挑戦です。と語ります。その姿勢には真理を探究する「良い土地」、また悪戦苦闘に耐えた「堅固な土台」を感じます。そして、行き着くところは社会への還元となる。そのことを語ります。

2) 社会への還元

求められてリーディングエッジの大学で教えた時、優秀な学生たちに会い、「この人たちが、優しい心をもって欲しい。」と願いました。そして、75歳になった今、設計30、後進の指導30、奉仕30と献身されております。大阪や東京の緑を回復するための植樹運動、東日本大震災の支援では50億円以上の支援金を集めたほど貢献されています。そして、安藤さんの今の「挑戦」もなんとこの間、癌との壮絶な闘いの後の働きであります。

最後に、自分の枠を超え、自分を引き上げてくれるのは、どの道に関わらず優れた先達に学ぶこと。その人達の作品や生き方、考え方に接することであります。それが、外国人であれば、できることならその人の語る原語で感じ取っていただきたい。そう思います。